

第2特集

敗血症の尾を掴め 難しい敗血症診療を解きほぐすための エッセンス

ドミノは倒れ始めた。しかし、まだできることはある

「敗血症なんだろうなあ……」

今から遡ること13年前、当時、沖縄で研修医として薫陶を受けていた筆者に師匠はそう呟いた。ある患者を前に、敗血症という決して眼に見える形としては現れないものを、まるで見えるかのように示唆するその背中が大きかった。そのときの指導医が見ていたであろう景色を、今となっては追体験できているものと自負しているが、本当に大切なものごとは眼に見えないし、ことさら敗血症診療は難しいのである。まるで倒れはじめたドミノのように待ったなしの緊急事態であるが、どんなに重症の患者であっても、いつだってできることは残されている。では、そんな難しい診療領域に熟達するための方策はあるのか。それは、膨大な思考過程を背景にシンプルな診療を目指すことである。シンプルとは、「簡易」や「単純」と和訳されるような浅はかな実践ではなく、その道を極めた先に見えてくるような到達点の1つである。近代英国をデザインしたともいわれるテレンス・コンラン氏も「シンプルであるということは、物事と深く向き合うための間をつくるということでもある」と述べている。この特集では、そんな命題を掲げつつ、いくつかのヒントを提案していきたい。

編集幹事・執筆

飯塚病院 総合診療科 山口裕崇